
わたしのなまえ

MCおもむろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのなまえ

【著者名】

ZZコード

N7774A

【作者名】

MCおもむろ

【あらすじ】

少女の名前を、聞いてはいけない。

(前書き)

(一警笛一) 真夜中ですか? 部屋の電気は消しましたか? 画面に近づいて見てますか? すべてに近づいてます。ひとつずつ電気をつけましょ。田に悪いので(笑)

シミのある、薄汚れたワンピースを着て、そこから露出した肌は

少女が、いた。

部屋の隅、他とは違つて少し薄暗い。

自室の白い天井。
無意識に僕はむくりと上半身を起こした。そして視線を真横に移す。そう、それが必然であったかのようだ。ドラマの脚本に沿う。

田を開く。

蒸し暑いのにクーラーの調子が悪い事と、なによりあの噂を聞いたからか。
怖がりの僕が聞いていい代物じや無かつた。その証拠に、僕は夜中にもかかわらず、部屋の電気を点けたままだ。
僕は自室のベッドの上で何度も寝返りを打つていたが、やがて瞼が重くなり、そして眠りについた。

今日は寝苦しい夜だった。

表情は見えない。少女は髪が長いわけじゃない。何やら、歪みの
ような、映りの悪いテレビのような。そのせいで、少女がひどく違
う世界の人を感じる。まるで合成写真のようだ。
少女がどこを見ているかもわからない。

僕は少女に話し掛けた。

「そう、当たり前のようだ。」

「君は……だれ？　名前はなんて言うの？」

「…………たし？…………わた…………は…………」

耳鳴りが聞こえ、ひどく聞き取りづらい。ノイズのような。そのた
め、少女の声は遠くで囁くみたいに、近くでしゃべるみたいに。

そのせいだ僕は眉をしかめた。それがわかったのか、少女は笑つ
た。

いや、更に空間が歪んだのかもしれない。

「わたしのなまえは

田を開く。

「…………田を開く？」

視界には白い天井。……そうか、夢だったのか。

名前……。その単語を思い出し、僕はぞっとする。

気が付けば、全身にじっとりと汗をかいていた。動くと、衣服が肌に張り付いて気持ち悪い。

無理もない。冷房が効かない上に、あの夢だ。

夢の最後に、少女に咳かれた直後、僕は目が覚めた。

いや、少女に咳かれて、目が覚めたみたいな感覚だ。今でも鮮明に、耳にこびりついて離れない。

喉がカラカラだ。僕は水道に向かうため、上半身を起き上がらせた。

少女が、いた。

縦長のベッドの、僕が足を向けるほうに、立っていた。

全身が泡立つような感覚。頭が真っ白だ。逃げるという選択も、せめて目を逸らすという選択も、今の僕には無かった。

少女の行動を待つよう、僕は少女を凝視していた。

空間が、歪む。

少女が、笑う。

「わ……しの……な……えはね……」

ノイズが耳にこびりつく。

その時僕は、強迫めいた物を感じた。

聞いてはいけない。

名前を聞いてはいけない。

何かを言わなくては。

頭で考えるより早く、口が先に動く。が、喉がカラカラで言葉がでない。口の動きだけが空回りしてしまう。少女は今にも口を開きそうだ。

僕の……僕の……

「……もう僕の前に現われるな！」

視界には白い天井。

僕は自分の発した声で目が覚めた。
汗の量は夢よりひどい。

起き上がり、自分の部屋をせわしなく見回す。

「……いない……よな？」

カーテンの隙間からは、低い位置にある朝日がちらつき、僕はホツとした。

自室を抜け、階段を下りて、リビングへのドアを開く。

「おはよう。あんたにしては起きるのが遅いじゃない」

リビングテーブルに座り、コーヒーをゅつたりすすつている人物に安心する。

「ううかな。それより姉さん、仕事は？」

姉さんは僕を呆れたように見る。

「何言つてんの、今日は曜日よ？……誰？」

不思議そうな顔の姉さん。たぶん、僕も同じ顔をしているだろ？。

「その後ろの女の子

途端、僕は固まる。動けない。

姉さんの不思議そうな顔は、僕に向けられたものじゃなかつた。

「ん？ 親戚にこんな子いたっけ？」

背中が寒い。

振り向いてはいけない。いや、振り向けない。動けないのだから。

僕は顔を前に向けたまま、姉さんの行動を見張つた。
姉さんは微笑みながら、しつらに歩いてくる。

しゃがみ、僕の腰の横を見る。

「お名前、なんて言つの？」

「わたし？」

耳元で聞こえる。

ノイズが、響く。

「わたしのなまえは

(後書き)

どうでしたでしょうか？ネタもオチもありきたりでしたね（苦笑）少しでも『恐い』と思っていただけたら、作者は小踊りしてしまうでしょう。いえ、踊り狂います。いえ、踊り狂つてみせます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774a/>

わたしのなまえ

2010年11月10日10時48分発行